

sube / shirube [reboot]
2021-2022
#01 Moriya Yuki
only the voice remained
@ Gallery PARC

蛇が歩く音

only the voice remained

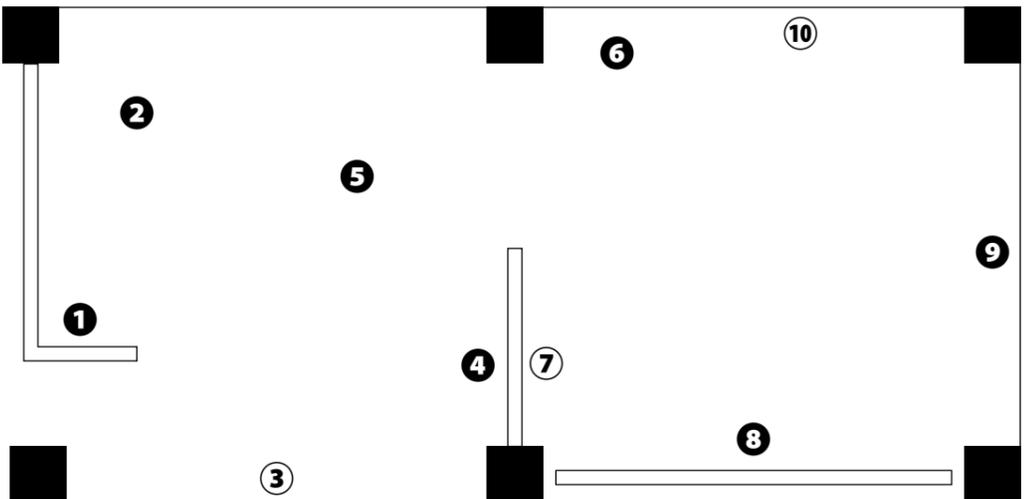
守屋友樹

Moriya Yuki

さまざまな土地でフィールドワークを行なっている...
その土地に関する昔話や伝え、全く関係の無い世間話と雑多なものだ。なかでも雨や川、湖などの水と深く関わる物語が多くあった。土砂崩れや洪水がよく起こる地域では災害として直接語られるのではなく、人に変身した蛇や龍として現れている。自然を擬人化するのには、言葉のうちに精神と肉体を与える作業ではないだろうか。同時に、土地の歴史や性質を語り継ぐ手立てとしてでもあり、個人の感受を残すことでもある。僕は、蛇の擬人化や象徴から目に映る自然を見返すことを行なう。

2012年1月の早朝僕は諏訪湖の辺りにいた。栓をしたように硬く凍結した湖面には、冷えた風が吹いているのに少しの波も立たなかった。目に映る景色は何も変化が無く、写真のように固定された時間を過ごしているような気がした。遠くで車が走る音や山おろしによる低くかすれた音、いくつもの音が低く静かに響き僕の耳に届く。吹く風が止むとガラスでガラスを引く掻くような音が延々と鳴っているのに気がついた。何が鳴っているのか分からなくて辺りを見回したけど、視界には凍った世界があるだけで動いているものはなかった。どうやら湖面の水から聞こえているようにだ。静止しているように動いている、見えない運動がここにはあると示すように響いている。湖という器が音を鳴らしているようで、まるでスピーカーかみだだと思った。繰り返される音に変化はなく、無機質で終わりの見えない果てしなさがあった。音の反復に、心地よさと同時に怖さを感じた。聞いているとオウディウスの『変身物語』にある話を思い出す。ナルキッソスに恋したエーコーは、女神ユノーの怒りを買って相手の声を繰り返すことしかできないようにされた。エーコーは、ナルキッソスに愚弄され、悲しみに暮れ、身体を失った後も声だけが残った。やがてナルキッソスも水面に映る自身に恋煩いし嘆き死ぬ。衰弱死する直前にナルキッソスは、エーコーと自身に向けて別れの挨拶を言い、エーコーは木霊させる。声の返し合いが合わせ鏡のような関係を想像させると同時に、生と死が相対していると思った。音は、物語を想像させ、自分が居る場所と結びつけてくれる。この体験は僕の制作方法や興味を緩やかに変化させた機会だったと今でも思う。

京都に戻って諏訪湖の凍結について調べると、寒暖による膨張と収縮の力によって凍結面に亀裂が入る「御神渡り」と呼ばれる現象があることを知った。御神渡り



《蛇が歩く音》

2021~2022
インスタレーション

制作協力 小坂大毅、小笠原周、金光男

1 蛇が歩く音 #untitled

2021
額、シルクスクリーンプリント、透明アクリル板

「掲載テキストの引用元」

松谷みよ子著『民話の世界』、吉野裕子著『蛇』、荒川紘著『龍の起源』、ルナル著『博物誌』、オウディウス著『変身物語』、信濃毎日新聞 郷土研究 4巻1号、民俗学3巻10号 古事記 飯田世代記(歌者不明)

2 蛇が歩く音 #eye

2021
鉄、黒曜石、たこ糸、鏡、LED電球、木材

3 『清源寺住職による話(蛇の脱皮を用いて「寿」を象って額装するようになった経緯)』

2022

4 lake

2022
オルガンシート、凍結した湖面が割れる音、アクリルミラー

5 蛇が歩く音 #become a serpent

2021
透明アクリル板にUVプリント、木材、鉄

6 蛇が歩く音 #untitled

2021
スライドプロジェクト、スライドフィルム、黒曜石、木材

「2022年追記」
去年の秋に南丹市八木町内にある元酒蔵でこの作品を発表をした際、副題を「walk with serpent」としていた。作品内に出てくる蛇という象徴が目には見えない形となって共に時間を経っていくことを暗示としてつけたものです。しかし、今回、目には見えないもの、聞くことができない音を想像してみた時、不在の周辺から物語るいくつもの声があることを意識していました。展示会場や八木町内で出会った人たちが蛇にまつわる話を聞き、パソコンで文字起こした際、肉體から離れた声がモニターに表示されていることに気がつき「only the voice remained」雷だけが残ったと変更しました。

守屋友樹 略歴

- 2021 個展「蛇が歩く音」(オーエスマートサイト)
2020 影を刺す光 三蘇伊紗+守屋友樹(京都芸術センター)
「SUBJECT/OBJECT」HOTEL ANTEROOM KYOTO/京都
2019「きりとりむと」と未来の墓標あるいはね(動画の時代) 2019.2020「ハッブル」ギャラリー/神奈川
2019 個展「シシガタヒカトリ」Gallery PARC/京都
2017 個展「still untitled & a women SJ」(KYOTO ART HOSTEL kunagusuku/京都)
「アーティストの居」(ARTZONE/京都)
7th Dai International Photography Exhibition Asia photo book showcase(中国大連市)
「未来の途中の星座 美術・工芸・デザイン」の新鋭9人展(京都工芸繊維大学/京都)
2016「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD」NEW VISION#3」(G/P Gallery/東京)
「ULTRA AWARD X ANTEROOM」(HOTEL ANTEROOM KYOTO/京都)
2015 個展「消えた山現れた石」(Gallery PARC/京都)
「ULTRA AWARD 2015 POST INTERNET ART」新しうなアートを「メタアートを」(京都造形芸術大学ギャラリーオーブ/京都)
「the catalogue」川内倫子ワークショップ成果発表展(京都造形芸術大学ギャラリー@KCUA/京都)
2014「KUD graduates under 30 selected」(京都造形芸術大学ギャラリーオーブ/京都)
2013「脈 vol.3」(G/P Gallery PARC/京都)
2012「脈 vol.2」(G/P Gallery PARC/京都)
2011 文化庁メディア芸術祭 京都展 パラレルワールド 京都私「パラレルワールド」(Gallery PARC/京都)
「photograph ナーティストを見たかS」(STUDOP Y3/札幌)
「脈」(Gallery PARC/京都)

- * パフォーミング・アート「守屋友樹と和田ながら」公演
2018 個展「SIC19」(石)「溶けちゃった」レポート 回まつてデザイン「青山」(ハラル/東京)
2017 個展「亀山」(ハラル)「山と海に貼り付けた」(三重)
2016 個展「私は春になったら」写真と劇場の未来のために山に登ることになった「石」溶けちゃった「レポート」回まつてデザイン「アトリエ劇研」(京都)

- Awards
2016 第14回写真「WALL」奨励賞 鷹野隆大 選
2016 第21回写真「WALL」奨励賞 増田玲 選



作家WEBSITE

7 『湖』

2022

8 蛇が歩く音 #note_blue

2021

写真、2018年12月のフィールドワークの日誌をリライアントしたテキストによる映像(8分40秒)

9 蛇が歩く音 #lake

2021

壺、振動スピーカー、凍結した湖面が割れる音

10 『八木町に住むお婆さんから聞いた蛇に関する話』

2022

2階エレベーター前

※「すべ」の「NON」記録映像 『蛇が歩く音/walk with serpent』

2021

プロデューサー 正木裕介
監督 一森幸田兵吾
出演 今村達紀
撮影助手 岡田美久、肥後亮祐、村田ちひろ

*以下は2021年開催の『蛇の歩く音』展で使用したテキストに
加筆・修正をしたものです。

ひとまず「蛇の歩く音」を想像してみてください。文字通り「蛇の歩く音」を思うならば、それは蛇が地面を這うズツツやズルズルといった音ではないでしょうか。あるいは「歩く音」に注目してしまっただけの場合、よりよって蛇の「足音」にどんな音を感じるだろうか？

写真家・守屋友樹にとつてそれは少しぐもった『ギーギー』や『バキバキ』に近い音だと思います。

2012年冬、実家のある東京に向かう途中、守屋は長野県・諏訪湖に「なんとなく」立ち寄った。どうせ長距離移動なのだから、せつかくだし冬の大きな湖を見ておくか、といったところだったという。その年の厳しい寒さで湖面は凍結し、まるで静止したように思える諏訪湖のほとりに佇んでいると、湖から妙な音が聞こえてきたという。それは言葉にすると『ギーギー』や『バキバキ』かもしれないが、実際はもっと複雑な音だったのだろう。いずれにせよ守屋は静止したように思える時間・空間の中で聞こえる音を聴くうちに、それが凍った湖面に亀裂が入り、それが押し合い、擦れ合うような音であることを想像する。とともに、それが「見えないけど見えている」ことに気づいたという。そして後日、湖面の氷がジグザグに割れた画像などを見た守屋は、諏訪湖や近くの諏訪大社などに見られる龍蛇信仰から、まるで蛇(神)が通った跡のように見えたという。

以降、守屋はこの諏訪湖にまつわるリサーチに断続的に取り組んでいる。民話や文献資料の読み込みから、実際の聞き取りを含めたリサーチの過程では、今に残る語りや龍や龍が象徴として登場する土地の多くが水にまつわる場所であったことなどを発見している。

もちろん守屋は、何度か冬の諏訪湖に足を運んでいるが、なかなか凍結した湖面に遭遇する機会はなかった。そして2020年から2021年にかかる冬、守屋はようやく凍結した諏訪湖畔に立ち、「蛇の歩く音」を記録した。

本展『蛇の歩く音』は、およそ10年前の守屋の偶然の体験を出発点に、現在までのリサーチを総く企図されたもの。ここでは「目の前で見えるものしか写せない」写真を解体することにも、現在までに物語化された、象徴化された「蛇」を物質化し、抽象化することでそれぞれの在り方を変異させている。そして守屋は鑑賞者の内にイメージが生成される要素を準備・配置することにより、ここ(そこ)に「目に見えないけれど見えている」を現出させようとしている。

かつて酒やべりの場であった旧酒蔵の会場には、今でも「水」の象徴を強く感じることが出来る。地下水を組み上げるポンプの音、土升瓶を洗浄するための機械・溜水を素手さぐりする音、会場に流れれば「リ」とした空気がせせせせか水を感じさせる。守屋はこの水はまわりの空間に「蛇が歩く音」を「リ」して「蛇」を構成した。

本展の本かでも、でも光が満ち溢れる空間に設置された【蛇が歩く音#become a serpent.】は、蛇を思わせる守屋自身の手が、カラヴァッジオの《ナルキッソ》のように水面に合わせ鏡のように写り込む構図を持つ。透明アクリルにUVプリントされることで、常に反射光と透過光の狭間に現れるイメージは、差し込む光の変化に伴ってその印象は常に揺らぎ続ける。

【蛇が歩く音#water】は、浮き、氷柱や流木、氷の亀裂、ほおずき、男性器という「蛇を象徴する」写真を切り抜き・加工したフォルムがステンシルによって絵付けされた壺が配されている。これは「湖」という器が音を鳴らしているようで、まるでスピーカーみたいだと思っただけという守屋の実験が再び象徴されたもの。

【蛇が歩く音#untitled】には、これまでのリサーチで拾った文献の引用や、聞き取った物語などのテキストがシルクスクリーンによってプリントされている。アクリルで構築された蛇にまわりの物語は、素かみの光、あるいは筆書きの影が映り込むため、そのテキストは「手」で読むことは出来ない。また、背面には「床」に設置されたスライドプロジェクトによる【蛇が歩く音#untitled】は、写真が光によって成り立っていることを体感できるイメージ(撮影光を返すシカの眼、光を透過させる黒曜石)を投影したものである。

【蛇が歩く音#note blue】は、映画監督デレク・ジャーマンの遺作『ブルー』をきっかけに、この色に「死」をイメージした守屋が、冬の諏訪湖で感じた寒さに、別の取材で訪れた北海道での車中泊の際に苦しめられた記憶を重ねたもの。ザルの中に現れては消えていく写真は、壁のシミやテキストと関わらず、そのイメージを素直に表します。顔を持たず、瞬きをしない蛇の生物学的特徴は、それゆえに人々に畏怖され、あるいは神とされる理由のひとつであること云われている。それはまた鏡に象徴されることが多い。【蛇が歩く音#eye】は、裏向けられた鏡が黒曜石で削られ、次第に光が漏れ出して「目が開いてくる」。

これらはいずれも物語や言い伝え、信仰や象徴の中に見られる「蛇」の在り方を解体し、写真とオブジェクトにより再構築したものであり、そこに実際の蛇を見ることはない。しかし、それでも私たちはここに蛇を「見出す」ことが出来たのではないだろうか。あるいは目と想像によって蛇をそこに「現す」ことさえも。それは「写真」の在り方を解体することに重なるようにも思える。写真は「イメージ」画像が定着したものでなく、イメージは画像と想像の中で常に「運動」しているものであり、鑑賞者との間に生成されるものであることもまた。

さて、実のところ守屋が諏訪湖周辺に興味を持った大きなきっかけは、湖の近くに「守屋山」という山があったことでもあるそう。標高1651mのこの山は、永らく諏訪大社の神体山と伝承され、信じられてきた。しかし現在では、諏訪大社の神体山は別の山であるとの説が有力だといふ。その根拠としてはいくつもの理由があるが、大きな根拠としては『大社から見えもしないこの山が神体山であるはずがない』というこの山だ。それは事実ではあるだろう。しかし、「目の前に見えない」からといって、この山は、神は、存在しなかったと言えるだろうか？

正木裕介(Gallery PARC)

追記1:【lake】は録音した氷の割れる音源から、強い音の部分だけを抜き出して制作したオルゴール。

追記2:③は酒蔵での展覧会を訪れた近所の方のお話し、

⑩は会場近くの清源寺を訪れた際に伺ったお話し。

追記3:守屋は八木での展示後の2022年初旬に諏訪湖を訪れ、御神渡りを体験している。

「すべ」としては、ギャラリー・パルクが2020年より主催するプロジェクト。変容の中にある現在の社会状況にあって、「展覧会」という機会をよりタフに起動させ、残していくための方法の開発・獲得を目的に取り組みます。

「展覧会」とは、アーティストが表現(すべ)を社会に向けてひらく標(すべ)であり、鑑賞者は作品と空間・時間をもとにするなかで、それぞれに「すべ」の方法(すべ)を発見・体験する機会であるといえます。しかし、表現と社会、表現と鑑賞者が直接的に接することを必然とする展覧会という形式は、それゆえに近年の社会状況の変化の中で、鑑賞者からのアクセスが難しいものとなっています。

「すべ」としては「この現実的な矛盾に対して立ち止まるのではなく、そこから先に進むための試行錯誤に取り組みます。とりわけ展覧会における記録(映像・写真・言葉)のあり方に焦点をあて、ここに新たな構造を導入することで、記録それ自体による新たな鑑賞・体験の創出を試みるものです。これまで多くの展覧会における記録(写真・映像・情報)は、まず事実を残すことを目的に、実際の鑑賞体験を補遺・補完する機能を多く担っているといえます。しかし、鑑賞そのものが困難となり、展覧会の記録が補完すべき体験そのものが難しくなった現在、この記録が果たす機能や役割にも変化が必要ではないでしょうか。

「すべ」としては、2021年は、築400年を超える旧八木酒造を会場に、田中秀介(美術家)の絵画による展覧会「馴れ初め工場」と、守屋友樹(写真家)のインスタレーション作品により展覧会「蛇が歩く音」のそれぞれを展示公開したものです。それぞれの展示は、いずれも「空間と鑑賞者」を必須として、この場が生じる体験を作品の重要な要素として企図されたものです。では、いま「この展覧会」に生じた「体験」を『読み出し可能』なものとして記録するには、どのような方法があり得るのでしょうか。

また、本プロジェクトは、この展覧会とともに、それぞれの展示に取材した麦生田兵吾(写真家・映像作家)と今村達紀(振付家・ダンサー)による映像、野口卓海(美術批評・詩人)の編集・制作による記録物とにより構成されます。ひとつの展覧会を起点に、映像・記録がそれぞれの眼差しから作品や表現を発見・解釈し、それぞれの媒体の特性をもって「つくる・この」ことに取り組みます。

従来の「展覧会」と「その記録」という不可逆的な補完関係からそれぞれが自立して「このすべ」です。それらが読み出される時に再び関係する「このすべ」に新たな体験をおこす「このすべ」。これにより展覧会という体験がより広く、より遠くに「ひろく」この可能性に目を向け、そのための(すべ)を編み出していきます。

本展「守屋友樹:蛇の歩く音」の記録映像は、会場内エレベーター前に設置したモニターでご覧いただけます。

すべと しるべ(再)

sube / shirube [reboot]
2021-2022
#01 Moriya Yuki
only the voice remained
@ Gallery PARC

#01

蛇が歩く音

only the voice remained

守屋友樹

Moriya Yuki

ギャラリー・パルク

2022年6月11日(土) — 7月2日(日)

13時から19時まで

水・木休廊